

研究ノート

ゴーチエのモン＝サン＝ミシェル紀行

Sur *Le Mont-Saint-Michel* de Théophile Gautier

小倉 和子*
Kazuko OGURA

Théophile Gautier se rend en 1860 au Mont-Saint-Michel pour assister au 《spectacle》 que donne 《la grande marée du siècle》. Il envoie tout de suite au Moniteur universel ce que l'on pourrait appeler aujourd'hui un reportage. Pour décrire la plage qui s'étend à perte de vue, le changement subit et dramatique du ciel et la marée montante, l'écrivain romantique utilise un grand nombre de métaphores, qui témoignent bien de son talent poétique.

Keywords : ゴーチエ (Gautier) モン＝サン＝ミシェル (le Mont-Saint-Michel)
風景 (paysage) スペクタクル (spectacle) ロマン主義 (romantisme)

1. はじめに

フランスの大西洋岸、ノルマンディー地方とブルターニュ地方の境界に位置するモン＝サン＝ミシェルは、その地形が生み出す奇異な風景と、ベネディクト派の修道院とによって、古くから多くの人々を惹きつけてきた。このあたりはヨーロッパでもっとも潮の干満差が大きい地方で、周囲900メートル、高さ80メートルのモン＝サン＝ミシェルも、1879年に堤防が建設されるまでは、満潮時には島となり、干潮時には陸続きになっていた。「石塚 (Mont Tombe)」と呼ばれていたこの地に、アヴランシュの司教オベールが、夢枕にあらわれた大天使ミカエルの求めに応じて小礼拝堂を建立させたのが708年。966年にはベネディクト派の修道院が建てられ、16世紀まで増築が繰り返されることになる。多くの伝説や奇跡譚を生み出した島は、スペインのサンチアゴ＝デ＝コンポステラとならぶ巡礼のメッカになるが、まだ潮の満ち干の原理も知られていなかったため、海岸を徒歩で渡っているうちに突然潮が満ちてきて、流砂に足をとられて命を落とす巡礼者たちも少なくなかった。

中世を通じてたくさんのキリスト教徒を迎えたこの地もしかし、15世紀頃になるとかつてほどのにぎわいを見せなくなる。修道院生活が弛緩し、修道士の数も減って、建物が荒廃する。そしてついにフランス革命によって修道士たちが全員退去させられた後、1793年からは監獄として使用されるようになる¹⁾。

ところが19世紀の中頃になると、この山は一部の人たちのあいだでふたたび注目されるようになる。とはいえ、このたびの関心の的は、監獄と化した修道院よりもむしろまわりの風景のほうにあった。潮の満ち干の原理も知られるようになり、天体の引力の関係で春分と秋分には潮の干満差が最大になることがわかるようになると、物見高い人々が遠くからも訪れるようになるのである。それを後押ししたのがユーゴー (Victor Hugo, 1802-1885) やゴーチエ (Théophile Gautier, 1811-1872)、モーパッサン (Guy de Maupassant, 1850-1893) といった作家たちだった。とりわけ、ユーゴーやゴーチエのようなロマン主義の作家たちにとって、自然が定期的に脅威を見せつけるモン＝サン＝ミシェルの野生的な風景は、つよい好奇心をそそるも

* 立教大学観光学部助教授

のだったのである。

旅をこよなく愛したゴーチエは数多くの紀行文を残した作家だが、モン＝サン＝ミシェルについても、「モントゥール・ユニヴェルセル」紙²⁾の1860年4月3日と6日号の文芸欄に、「世紀の大潮」を見に行った報告を寄せている。即興的であるとはいえ、詩人としての資質をあますところなく発揮した美しい比喩が多用されたそのテキストは、当時の知識人がこの景勝地をどのようにとらえ、また、それをどのように読者に伝えようとしていたかを知るための格好の材料である。本稿では、ゴーチエ一流の比喩表現にも注目しながら、彼のモン＝サン＝ミシェル紀行を跡づけてみたい。

2. 砂浜の描写

われわれは、学者たちが「世紀の大潮」と呼んでいたものがどれほどバリの住人の想像力を刺激したか知っている。事が過ぎてからは、好奇心のこのきわめて自然な反応を冷やかす資格はだれにもないだろう。このすばらしいスペクタクルは見に行くだけの価値があるものだ…³⁾。

ゴーチエはこんな風に書き出している。彼はまずパリからレンヌまで鉄道で行き、そこから乗合馬車でポントルソンに向かい、残りの行程は二輪馬車を使った。

報告は干潮時の砂浜の描写から始まる。モン＝サン＝ミシエルの3キロ北にはトンプレーヌという小さな岩があるが、ゴーチエはモン＝サン＝ミシエルとこの岩の関係を、「巨人」にたいする「小びと」、「ピラミッド」にたいする「標石」(p.435)の関係だと言っている。というのも、1798年にナポレオンがエジプト遠征をおこなって以来、19世紀のフランスはちょっとしたエジプトブームに沸いていたからである。政治的野心が考古学的関心呼び覚まし、それをロマン主義の異国趣味があおるようにしてエジプトが脚光を浴びていたのだ⁴⁾。砂浜に屹立するモン＝サン＝ミシエルを砂漠のピラミッドになぞらえるアナロジーは当時かなり流布していたらしく、ノディエ(Charles Nodier, 1780-1844)は、ミシエルという青年が流砂にはまった妖精を竿で釣り上げるという美しくも幻想的な小説

『パン屑の妖精』(1832年刊)のなかで、モン＝サン＝ミシエルのことを「ピラミッド型の岩」とか、「玄武岩でできたピラミッド」などと呼んでいるし⁵⁾、ユーゴーもまた、アヴランシュからモン＝サン＝ミシエルを眺めながら、「海にそびえるピラミッド」という表現を用いてエジプトに思いを馳せている⁶⁾。

ゴーチエの独自性はむしろ、たとえば貝をとる漁師たちを描写するときに発揮される。裸足で砂浜を自由自在に動き回ってザルガイを採取する漁師たちは、遠くから見るとまるで「黒いコンマか、しぐさが人間の格好をまねている海鳥のように見える(p.436)」と言う。肩まで届くフードをかぶってうつむき加減になった漁師たちの姿がコンマか、胸の羽をふくらませた鳥に似ていて、彼らの素足は鳥の華奢な足にそっくりだ、というのだ。漁師と海鳥の一見唐突とみえる比較は、ひとたび対象に近づいてしまえばあっけなく無効になってしまうものだが、たしかに、海鳥たちも漁師と同じように貝採りの仕事をしていることに違いはない。

3. 空と大洋が繰り広げるスペクタクル

浜辺の描写をしているうちに、満潮に先立って雲行きがややしくなってくる。ゴーチエたちはモン＝サン＝ミシエルから約1キロ半の場所、堤防の端で、自然がくり広げる「スペクタクル」を待ちかねている。まだ雪が残る春分の日の夕方で、ときおり税関吏の小屋に暖を取りにいった、また見物の場所に戻り…ということを繰り返しながらである。

大洋の上演を待つあいだに、空がみずからの上演をしてくれた。それも、完全なかたちでおこなってくれたと認めなければならない。1時間のあいだに、ありとあらゆる種類の悪天候が相次ぎ、互いによりピトレスクな思いがけない効果をもたらしたのである。何も不足はなかった。一条の光線すらも(p.436)。

厚い雲の切れ間からもれた光が修道院の小鐘楼や控え壁、装飾アーケード、石落としなどを幻想的に浮き上がらせる。沖合では、霧がかかって見えなかった何艘かの船が、突然わずかな光線を受けて一瞬だけ姿をあらわしたりもする(同頁)。ゴーチエはこうしたことをじつに臨場感あふれる、実況中継的なタッチで描いていく。

大潮をひとつの「スペクタクル」の「上演」とみなす視点は、テキスト中に繰り返しあらわれる。そもそも、冒頭部分ですでに「このすばらしいスペクタクルは見に行くだけの価値がある」と明言されていた。自然が繰り広げるドラマチックな光景を「スペクタクル」としてとらえるこのような視点には、17世紀末から18世紀前半にかけてヨーロッパで台頭した自然神学の名残が多分に感じられる。外部世界をスペクタクルとして知覚し、人間という被造物をまえにして神が上演してくれる芝居の舞台とみなす思想は、バロック期以降、とりわけイギリスで広まり、アンリ・ブレモンのいう「風景の聖化」をもたらした⁷⁾。古典主義時代にはまったく見向きもされなかった、文明に先立つ無秩序を象徴するかのような海の風景が、ロマン主義とともに人々に受け入れられ、さまざまな欲望や歓喜をうみだす装置として文学や絵画のなかでもとりあげられるようになるには、自然神学という下地があったのである。

空の「怒りが絶頂にたった (p.437)」後、嵐は次第におさまリ、それと引き替えにいいよ「スペクタクル」が本番を迎える。風の甲高い音に混じって、低いうなり声とともに「泡の房飾り」が「花綱模様」を広げにやってきた。みるみる迫ってくる満ち潮は「白馬の騎兵隊」にたとえられる (同頁)。夕方5時を少し回った頃である。先ほどまでわずかに青い部分を残していた空は、今や黒い薄絹で幾重にもおおわれ、乳白色の海と完璧なコントラストを成している。

「スペクタクル」の比喩はまた、舞台の「明転」への連想をも生み出す。小屋で少し暖まってから監視場所に戻ったゴーチエたちは、もっとも特異な光景に立ち会うことになる。すなわち、自分たちの目の前に確かに存在していたモン＝サン＝ミシェルが忽然と姿を消してしまったのである。一吹き風の合図に、「嵐の道具方」が海から霧を発生させ、空から雲を降ろしてきて、モン＝サン＝ミシェルを頭のとっぺんから足の先まで隠してしまったのだ。ゴーチエは、オペラなどの舞台で、観客の目の前で場面を転換するいわゆる「明転」でさえ、けっしてこれほど敏捷に、魔法のように事を運ぶことはできないだろう、と驚嘆する (p.438)。

数分後、ふたたび姿をあらわしたモン＝サン＝ミシェルはもはや山ではなく、島になっていた。

4. 島の内部

「世紀の大潮」を見物して満足したゴーチエたちは、その日はいったんポントルソンに戻り、翌日いいよ、潮は引いてもまだすべりやすい堤防を歩くのを避けて、舟でクエノン川を下り、モン＝サン＝ミシェルに到着する。

今や飲食店に変わり、看板にその名をとどめるにすぎない中世の巡礼者用の旅籠に思いを馳せたあと、城塞沿いに散歩し、石落としの穴や、溶けた鉛や煮えたぎったタールをそこから流したという平場を見物する。その後、今では監獄と化した修道院の内部を見学して、内庭回廊の列柱にほどこされた繊細な装飾に感嘆してから、鐘楼にのぼってすばらしい眺めを堪能する。しかし、それらを報告する筆致には、残念ながら前日ほどの勢いは感じられない。たった一度、それも数時間見学したくらいで、島の内部の魅力を十分に伝える資格は自分にはないことを自覚していると同時に、やはりロマン主義の作家たるゴーチエを魅了したのは、モン＝サン＝ミシェル自体というより、その外にひろがる野生的な風景であり、とりわけ「世紀の大潮」だったといわざるをえないだろう。

特筆にあたいするのは、モン＝サン＝ミシェルの島全体を、(今度はエジプトではなく) 古代ギリシアのアクロポリスと比較している点である。アテネとモン＝サン＝ミシェル。どちらもその中央に神殿＝聖堂を頂いているが、一方は水平性をもとめるギリシア建築で、他方は垂直性をもとめるゴシック建築。一方は地中海に面した青空のもとで多神教が生み出した神殿であり、他方は大西洋の靄のなかにそびえる一神教の聖堂である (p.440)。

大潮を見に来たついでに島の内部を見学した、というのが正直なところだろうが、それでも、階段を昇ったり降りたりしながらそこここに見発する地下牢や納骨所、独房などは、ゴーチエを十分に楽しませてくれたようだ。中世の不気味な雰囲気をもったたたえて建物の内部を探検するのは、アン・ラドクリフ (Ann Radcliffe, 1764-1823) の恐怖小説を読んだり、迷宮の悪夢を喚起するピラネージ (Giovanni Battista Piranesi, 1720-1778) の版画集『牢獄』を繰ったりする喜びに似ていると言う。そして、ゴヤ (Francisco de Goya y Lucientes, 1746-1828) の絵に出てくるようなコ

ウモリがぶら下がった教会の丸天井の下を、ルイス (Matthew Gregory Lewis, 1775-1818) に登場する破戒僧がランプを手にさまよっている様子などを想像しながら、しばしゴシック・ロマン的な夢想とたわむれるのである(p.443-444)。

5. おわりに

ゴーチエのモン＝サン＝ミシェル紀行は、現在われわれが日常的に読む雑誌にもよく見られる、いわゆる旅行ルポルタージュ⁸⁾の走りのようなものとして位置づけることができるだろう。見渡すかぎりの干潟や、満ち潮に先立つ天候の急変、迫りくる潮の様子などを詩人一流の比喻を駆使して、しかも臨場感あふれる筆致で描くところに彼の紀行文の醍醐味がある。野生の自然が見せつけるこうした光景への関心は、すぐれてロマン主義的な感性によるものであり、交通手段の発達にも助けられて、ピトレスクな旅とその記述を生み出したわけである。中世以来多くの旅行者を受け入れ、1979年にはユネスコの世界遺産にも登録されて、今でも年間300万人の観光客でにぎわうこの小さな島に注がれる視線は、ゴーチエあたりを境に大きく変化したと言えるだろう。

注

- 1) Voir Jean-Paul Brighelli, *Entre ciel et mer, le Mont Saint-Michel*, Gallimard, coll. 《Découvertes Gallimard》, 1987; Maylis Baylé et al. *Le Mont-Saint-Michel, Histoire & Imaginaire*, éd. du Patrimoine, 1998; アンリ・ドウカン『モン・サン＝ミシェル』éd. du Patrimoine, 1999.
- 2) *Le Moniteur universel* は政府発行の日刊紙。マイクロフ

イルムからのコピーを見せてくださった市川裕史氏にお礼を申し上げる。このテキストは1865年に *Quand on voyage* と題して Michel Lévy から出版されたが、本稿は Bouquins 叢書に再録されたものに拠っている。Jean M. Goulemot, Paul Lidsky et Didier Masseau, *Le Voyage en France*, t.2, Robert Laffont, coll. 《Bouquins》, p.434-445.

- 3) *Ibid.*, p.434. 以下、同書からの引用は、直後にページ数のみを記す。
- 4) 1799年にナポレオンが帰国したあとも、学者たちは考古学調査のために残り、そこでの成果を『エジプト誌』(全20巻)(1809-1822)として発表する。また、かのシャンポリオン (Jean-François Champollion, 1790-1832) は1826年にルーヴル博物館のエジプト部門の学芸員に任命され、28年から30年にかけてエジプトに調査団を組織している。帰国後31年には、最高学府のコレージュ・ド・フランスに彼のためにエジプト学の講座が新設された。
- 5) Ch. Nodier, *Œuvres de Charles Nodier*, t.IV, *La Fée aux miettes*, Slatkine Reprints, Genève, 1968 (Réimpression de l'édition de Paris, 1832-1837, 12 volumes), p.82 et p.114.
- 6) Victor Hugo, *Les Quatre Vents de l'esprit*, 1881, 《Près d'Avranches》, *Œuvres complètes, Poésie III*, Robert Laffont, coll. 《Bouquins》, 1985, p.1301.
- 7) アラン・コルバン『浜辺の誕生』(福井和美訳)、藤原書店、1992年、21-130頁。
- 8) ロベール辞典によれば、reportage (探訪記事、現地報告) という語は1865年あたりから使われるようになったらしい。

*この研究ノートは、立教大学観光学部の学部研究費による補助を受けたプロジェクト研究「フランス文学と風景」の一部である。